

舞楽抜頭のたてがみについて

——インド伝承医典との関連——

杉 本 茂 春

1. 高楠説と成立機序

舞楽抜頭の研究は、高楠順次郎先生によって、明治40年、『史学雑誌』6号7号に発表された論考「奈良朝の音楽、殊に臨邑八楽について」のなかで論じられて以来、特に目新しい進展をみせないまま今日に至っている。すなわち、芸能そのものの由来や、発生機序については副次的にかるく扱われていて、芸能説話起源説のなかで、Peduの神（馬神）の毒蛇退治説話、リグヴェーダに由来するものとの仮説にたって、高楠順次郎先生は特異な抜頭面の垂れ髪を pedu に因んで、馬のたてがみとまでみなしていられる。しかし、これは単なる仮想・仮説であって根拠のないこと、また、抜頭を馬頭とみようとする高楠説が誤りであることは今日言語学的にも明らかにされているところである。（杉本茂春；舞楽抜頭の研究，臨牀歯科307号）

そこで、わたくしは舞楽抜頭を従来通り異国伝来の芸能としてみることにし、この芸能の起源を狩猟系異民族の呪術的行為に由来し、その成立機序を英雄的狩猟行為においた異質の芸能であろうと考えるにいたった。

2. 由来と背景

わが国の古代芸能といえる神楽は祭祀起源と考えてよいであろう。日本の芸能は、「祭儀より派生し、その方法と本義を脱し切ることなく近代を迎えるに至ったことは、もはや疑いのない事実」と、『芸能における美意識の発生』のなかで小笠原恭子先生は述べておられる。そうしたわが国古

来の芸能に関する民族意識のなかで、あやしい、苦渋にみちた形相の呪術者の呪術・呪力によって、もののけの憑いた異常なふるまい、怪力の持ち主となった英雄的狩人戦士の闘舞がまったく異様に感じられたことであろう。

しかもそれは、かつての伎楽のように単なる異質な異民族の輸入芸能ではなく、先進、唐の文化、すなわち、漢土中原に位置する長安の文物文化を培った農耕系漢民族の体質的なふるいわけを受け、そのうえにも中華儒教の思想による脚色を加えられたうえで、伝えられたこの舞楽は、もはや林邑固有のものではなく、且つ、受容を拒むほどに卑俗な土俗散楽でもなく、じゅうぶんに国際的色彩をつよめ、わが国の国民性にもマッチし納得のできる舞曲「舞楽」として伝えられた。

さきに輸入された伎楽があれほど異色豊かで、明朗潤達な白日下の演舞芸能であったにもかかわらず、またたくうちに忘れ去られて生命を失い、その装束や古面などはのこされたが、かんじんの芸能の型そのもの、振りそのものを惜し気もなく捨て去って省ることのなかったのはわが国の芸能における美の意識と相容れなかったことによるであろう。

舞楽抜頭は、そうしたわが国の美意識が大唐の脚色を経、且つ、先進文化に心酔する思想的背景のなかでもてはやされて今日に至ったのである。

3. 中国の修飾

『舞楽図説』には、舞楽抜頭の異様なはじめの型、まえ髪を垂らして、面前にすだれをかけたよ

う、あたかもその面貌をおおうようにして蹲居（しゃがみがむ）する。秀いでた額、たかくそびえる雄偉な鸚鵡（おーむ）鼻、さえざえと釣りあがった眉、まなじりを裂くようにしてみひらいた忿怒の刮目、口角をじゅうぶんにへこませた無念の形相、筋肉質にひきしまった頬からあごへの筋骨の張り、咬筋、口輪筋、頬筋、眼輪筋、頤筋、いわゆる顔面部諸筋個々の動きとその関連、連動をあざやかにみせた、その面貌のつよさをかくすようにおおい、しかも舞台中央に伏せくもらせてかがみこむすがたがえがかれている。そのまま、舞台の上で今まさに躍動の演技に移ろうとするたまゆらのしじまを写している。いかにも老いた父親をトラに食い殺されて嘆き悲しむ悲愁のすがたは孝行の志あつい若者の悲嘆を写したシーンとして、舞いの発端をなしているのである。

それから勇武なたたかい、闘争演技の末、トラを仕止めた勇しい勝利の舞いに展開してゆく、狩猟孝行譚として今日に及んでいる。とりもなおさず、芸能起源を説話に拠ろうとする考えに他ならないであろう。

4. 呪法の祭儀化

舞楽抜頭を呪術の力によって、西欧伝承の百獣の王ライオンに憑いてもらって、東亜の獣王、どう猛のトラ將軍に立ち向う霊力をうけ、勇躍する呪術師の狩猟にたずさわる格闘の舞いとわたくしはみているのである。

舞台にのぼって、しばしのあいだしゃがみこんでうつむき伏すがたは、無念無想一心不乱に降魔の霊力を身体にさずかろうとして呪禁呪術するさまであろうとわたくしは考える。

もともと、これは肉体の限界にいどうとする真言密教の教え、九日九夜の断食断水断眠、ご摩供の行法であった。人間の死を賭しての秘密必死の修呪の法で、これが次第に簡略化されて三日三夜の修法となり、一日の修法となり、ただひとときの演技に凝縮したのであると考えるのである。したがって、これは東大寺二月堂の修二会別火修法がその心を厳格にのこしているとみてよいのではないだろうか。



抜頭大面

図 1 抜頭大面

5. ライオン信仰

舞楽抜頭の面の垂れ髪は、ライオンのたてがみを象どってつけ加えられたもの、その心は西欧系狩猟遊牧民族が伝統的にライオンをおそれうやまい、恐れると同時にその勇猛な行動力、瞬発威力にあこがれの心をいだいて絶えずその力にあやりたい願望をもっていた。つねにライオンマンでありたいとねがってやまなかったことによるのであろう。

西欧殊に近東の勇士はライオンと格闘して、勝った勇者を大王とよびならわして尊敬したという。人間とライオンが一騎打ちを演じて、ほんとうに勝てたかどうか、今日的人类とライオンを簡易に比較してはならないと思う。

古代の人類は今日では想像もつかないほど強力な筋骨を持っていたであろう。ネアンデルタール、ハイデルベルグ原人の筋骨を想像してみるまでもなく、ある強力な野性人時代を経験してきたことはまちがいないことであろう。

また、ライオンについては、古代の野性ライオンが全世界に繁殖していた時代から、食糧となる草食獣の減少によって次第に生息地を狭められてゆく過程で、人類との格闘を余儀なくされ、そして絶滅してゆく地域もあった。または、食糧となるべき草食獣を追って、退去していった地域もあろう。はじめから今日のライオン生息地だけが生息適地であったとは考えないほうがむしろ妥当



抜頭古図

図 2 抜頭古図

ではないか。

ライオンがインド西北地方に住んでいたという記録もある。

6. インド医典とライオン

インド伝承医学アーユルヴェーダは生命の科学として、今や、世界の注目を浴びている。その中の一部として外科学書、スシュルタ本集 (SUSHRUTA-SAMHITA) がある。

大地原誠玄先生の訳本によれば、「第7章ヤントラ用法章 (Yantra vidhyadhyāya)」には、「異物の体内に入りて精神及肉体に苦痛を与ふるものは“シャリヤ”なり、是等の“シャリヤ”を除去する方便は即ち“ヤントラ”なり。“ヤントラ”を大別して次の六型となす。

- I スヴスチカ・ヤントラ
(Svastika- yantra 鉗子類)
- II サندانジャ・ヤントラ
(Sandamja-yantra 鑷子類)
- III ターラ・ヤントラ
(tāla-yantra 顎状または鍵状)
- IV ナージー・ヤントラ
(nādi-yantara 管状)
- V シャラーカー・ヤントラ
(jalākā yanatra 棒状)
- VI ウパ・ヤントラ
(Upa-yantra 補助的)

第1型に属するもの24種……獅子・虎・狼・ハイエナ・熊・豹・猫・ジャコール・ムリグエール・ヴールカ (1種の穴居獣)・鳥・アオサギ・クララ (ワジロワシ属)・チャーシャ (仏法僧属)・バーサ (ハゲタカ属)・大鷹・フクロウ・トビ・ハヤブサ・ハゲワシ・ダイシヤクシギ・モズ・アンジャリカルナ・アヴバンジヤナ・ナンディームカ (水禽のI種)のくちばしの如き端を有し……」となっていて、それぞれ動物のくちまたはくちばしにかたどってあると説明されている。

また、K.L. Bhishagratna による英訳本、SUSHRUTA SAMHITĀ にも、Svastika を forceps とし、lions・tigers・wolves・hyenas・bears cats・jackals・deer・Ervarukas (a species of deer)・crows・cormorants・kururas (a species of bird) Hāsas (a species of sparrow)・vultures・falcons・owls・kites・herons・Bhringarājas (a species of bird)・Anjalikarnas・Avabhanjanas・Nandimukhas and such like beasts and birds. として鉗子類のくちばしをそれぞれの鳥獣にかたどっているところから、次のことが考えあわせられる。

1 こうした記述から直ちにライオンがインドに生息していたかどうかは断定できないけれども、少なくともスシュルタはライオンを知っており、ライオンの強さを第一と考えていたらしい。

2 トラはインドに生息しており、この古典医書からみるかぎり、ライオンに次く強さと考えられていたらしい。

3 ライオン・トラ以外の猛獣猛禽の口やくちばしにかたどる という考えは、その強力な噛む力、くわえる力、はさむ力、つかむ力いわゆる把持力にあやかろうとする呪術力に期待するためであったと考えてよいであろう。

4 決して、それらの動物のかたち似通わせることが本来の目的ではなかったと考えたほうがよい。その証拠には、次第に動物に似せる方法は失われて、作用作業に適する簡略化が進んでいったことによっても表徴され、且つ、証明されるであろう。

7. 音義の考察

さてそこで、舞樂拔頭が、親をトラに食い殺された息子が悲嘆のあまり……と解説されてきた出典は、『旧唐書』には、「撥頭出西域胡人為猛獸所噬其子求獸殺之為此舞以像之也」とあり、『楽府雜錄』にも、「鉢頭昔有人父為虎所傷遂上山尋其父屍山有八折故曲八疊……」とあって、唐の翻案によって、単なる Bhatta の舞を中華、儒教思想でモディファイし、修飾を加えて、呪術によって呪力を受けようとするシャーマンの禱りを孝行息子の孝子譚に置きかえたものにちがいないのである。

このようにみてくると、すべてが諒解できてくるのではないか。

Bhata Bhatta の舞は、「拔頭」「髮頭」「撥頭」

「鉢頭」(高楠先生は「馬頭」をもかかっている)と音写されている。それら漢音写の辛苦を通覧してみると次の通りである。

髮 ながいかみのけがそろうにかたどって頭上にはえてるかみの意をあらわす

鉢 梵語 Patra の音写、僧が代々うけつぐたいせつなもの

拔 攻めおとす、敵陣をけ散らし攻めおとす

撥 はねかえす、相手をはねかえす

頭 先達またはおさ、職人などのおやかた

このように列挙してみると舞樂拔頭は、「髮頭」ながいかみの毛、すなわち、もっとも強猛なライオンのたてがみをいただいた狩人の親方の舞いとよむのがもっとも原義に忠実、且つ成立当初の理念に近いと言っても過言でないを考える。